



筑紫女学園大学リポジット

Viewpoint Taken in Modern Chinese Literary Anthology, "Short Short Stories on Clean Politics" : Ideologies of Its Compilation and Features of Its Literary Expressions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/138

中国現代文学作品集《廉政小小説》への視角

その編集理念と作品表現の特徴について

石 其 琳

Viewpoint Taken in Modern Chinese Literary Anthology, “Short Short Stories on Clean Politics”

- Ideologies of Its Compilation and Features of Its Literary Expressions

Kirin SEKI

はじめに

2000年中国現代文学大系に「微型小説」(ショット・ショット)の巻が増設されて以来、中国現代文学における新しいジャンル「ショット・ショット」文体の創作分野が明確に位置づけられたのである。これまでにこのジャンルを代表する名称、創作範疇などについてさまざまな議論が積み重ねられて来たが、それに対して、社会的に受容され、読者層も継続して広がり、更に世界の華人文学として広範囲に展開されたのである。その間、多数の作家の育成と好作品を作り出した実績が積み重ねられ、社会または文学界における位置づけが定着されたのである。現在では「微型小説」と「小小説」二通りの名称が、同時に使用されているが、同質ものとして見るのが一般的である。

ショット・ショット作品の本体が短いために社会へ伝達する速度が早く、この二つの要素は現代社会のライフスタイルに合致し、読者層が広範囲に浸透され、社会への影響力も大きいと考えられる。創作に要する時間が少なく、創作者数も多い結果、作品数が膨大であることは事実である。このような現実により、作者の個人作品集が多く編集されるほか、文学関係の組織における年度的選集は毎年多くの種類が各出版社より編集出版されている。それ以外にさまざまな社会問題をテーマに、同趣旨のものを作品集として集め、作家自身または出版側によって編集されることも盛んに行われている。例えば、「家庭」、「恋愛」などがある。また芸術表現の視点にみる「ユーモア」、「風刺」などの趣旨を中心として編集出版されたものも多く見られる。更に読者層を限定して、例えば中、小学生向けの小小説作品集、または一定範囲の対象と舞台を限定した校園(キャンパス)小説なども出版されたのである。これまでショット・ショットジャンルについて、数回異なる作品集について研究してきたが、今回は現在中国で数多く出版された「微型小説」・「小小説」(ショット・ショット)作品集において、少々異色の作品集の一つ《廉政小小説》に注目し、取り上げたい。

一般に政治を文学の創作テーマにするのは、世界の文学創作範疇においてみても、決して特別なことではない。しかしこの《廉政小小説》作品集の書名を見る限り、決して一般的な政治テーマと

は言えないであろう。なぜなら、題名が「廉政」(清廉な政治)であるため、限られた政治範疇が創作のテーマに設定されており、中身がもっぱら説教性を持った無味乾燥な作品が集められているのではないかと想定されるだろう。

本論はこの作品集が持つ異色性について、その編集理念と背景には、中国の長い歴史伝承性が深く関わっており、その文学的価値と社会的使命を重要視せねばならないと考える。そして作品を具体的に取り上げ、作品の編集意図を明らかにし、それぞれの作品における文学的表現の特徴について、「小小説」特有な芸術的表現を展開しながら「廉政」と言う堅い理念を捉えている点を検討する。さらにこの作品集の内容が中国現代政治社会の実態を反映していることであり、その問題点を考察できると考える。

第1章 《廉政小小説》の編集意図と背景について

1997年3月11日中国「最高人民検察院検察長」張思卿氏が「第8回人民大会第5回会議」で1996年中国国内各級検察機関共同立案偵察貪汚、賄賂、公金私用、巨額の財産の由来不明などの犯罪案件は6万1千件以上あると報告している。そしてこの数字はまだ氷山の一角だと言っている。隠蔽された犯罪または明らかに捜査出来ない犯罪案件も多くふくまれていることは事実である。改革解放後、金銭と物質に対する執着が社会風潮を歪まれ、深刻な社会問題になっているのである。以下はこの社会風潮に深く関わる作品集《廉政小小説》が編集、出版された意図と背景について、説明を加えながら明らかにする。

《廉政小小説》作品集に関する出版状況は以下である。

- (1) 《廉政文化叢書》 2004年 中国方正出版社
- (2) 《廉政文化叢書》第2集(5巻) 2005年 中国方正出版社

その(2)の《廉政文化叢書》の5巻の内容については①《廉政時評》②《廉政韻文碑刻》③《廉内助貪内助》④《廉政小小説》⑤《廉政曲芸》の5つの作品集によって編纂されている。書名から見ると、それぞれジャンルこそ異なるが、すべてが「廉政」(清廉な政治)をテーマにし、関係する内容であるのは明白である。

《廉政小小説》は2005年中国方正出版社より出版された《廉政文化叢書》第2集の5巻の一つであるが、そもそも《廉政文化叢書》が2年連続で出版された背景には、政府の政策に深く関わっているのが事実である。この作品集の前序によれば、2004年浙江省寧波市鄞州区の「廉政文化」推進活動の一環として、浙江省政府機関の支持下、《中国廉政文化叢書》を編集出版されている。翌年の2005年に、廉政文化推進事業担当責任者の中央紀委副書記刘峰岩氏が更に活動を進展させ、継続して《中国廉政文化叢書》第2集(5巻)を企画し、編集出版したのである。当然この廉政文化推進活動は、単に書籍を出版することではない。刘氏の序文によれば、「廉政文化」を推進するにあたって、政府側から腐敗防止に対する実施方案が提示され、それに関する歌曲を創作し、歌唱コンクールをTV中継までさせて盛大に開催している。ほかにも「廉政」の理念を宣伝するための広告

創作コンクールと展覧会も開催されたのである。この一連の廉政文化推進活動を展開して、民衆の生活へ浸透させ、学校、家庭、住民団体、企業、農村まで伝達できるように、さまざまな政策を行う中、この作品集も末端への宣伝教育に有力な手段の一つとして編集されたのである。

以上述べてきた事実背景より、作品集《廉政小小説》に限らず、《廉政文化叢書》の編集の背景と意図において、現地政府が関与する政策的要素がかなり強いことは明白である。しかしここで注目したいのは、《廉政文化叢書》を編集する必要があると考え、「小小説」というジャンルに着目し、その作品集まで編纂して廉政文化建設の理念を貫こうという点である。そしてこの叢書を編纂する考案は決して一地方政策だけに限られたことではない。実際廉政文化建設関係事業は、中国の全国的規模で広がっており、概ね党中央機構に関わっているものが多い、そして政治法律政策だけに頼らずに、教養的面的において、清廉意識を強化する活動も多く行なわれている。例えば各地方新聞が発行する「廉政週刊」もその一例である。このように廉政理念に対する関心と重視は、現代だけに始まったことではない。特に中国において、廉政文化はかなり古い歴史的伝統を持っている。以下は、この点について検討する。

第2章 「廉政文化」理念の伝承について

古今東西を問わず、清廉な政治の理念は常に人々に望まれ、世界中の国々が追求する理想的政治形態であるが、しかし国際的民間機構「透明国際」組織（Transparency International）（略称 TI）が2004年10月7日2003年の世界各国の腐敗指数を公表して、清廉政府と承認したのは16カ国である。報告によると、世界で毎年賄賂に使う金額が4千億ドルを越え、世界中の政治的な汚職の実態は重症であると言える。世界各国は腐敗を厳罰する政策を行い、収賄を制裁する法律を定めるなど、あらゆる方法を使い清廉政府へと目指しているが、簡単に良い成果が得られないのが実状である。中国でも古より現在まで、腐敗を一掃できない現実があり、深刻な問題を抱えている。

本論が取り上げたい作品集《廉政小小説》は言葉通り清廉な政治思想を拡げたいというのが作品集の宗旨である。文学作品が「政治」を創作のテーマにすることは別に珍しいものではない。この作品集のように清廉な政治を目標に掲げ、社会に対して警鐘を鳴らし、また庶民を教育する方針を明確に提示するものは、中国歴史の文献において、数多くの例が存在する。中国古典経書から各時代の文人の詩作まで、清廉な政治に関する警句は随所に残されている。ここで数例を挙げてみよう。

- ① 「富与貴、是人之所欲也。不以其道得之、不居也。」《論語・里仁》（春秋時代）
- ② 「上有好者、下必有甚焉者矣。」《孟子・滕文公上》（戦国時代）
- ③ 「爲主貪、必喪其国。爲臣貪、必亡其身。」吳兢《貞觀政要・貪鄙》（唐太宗言）
- ④ 「廉者、民之表也。貪者、民之賊也。」《包丞乞不用脏吏疏》（宋代）

上述した4つの例句同様に、知識人の手によって書き出されたものが、実に枚挙に暇がないほど多く残されているが、ほかに庶民層によって作り出されたものも存在する。以下ここで古来より「廉政」に関する理念伝承の流れを述べる。

一 歴史文献による伝承

さて、清廉な政治の思想を現実に文学作品または歴史記録として残されているのは、官の支配側から意図的に作り上げたものと庶民層による自然発生するものが存在する。官の支配側の視点からその伝承性を検討する際、まず歴史文献を中心として考えるべきであろう。中国古代の文献において、「廉政思想」の理念と形の歴史記録として定着させたのは、後世への歴史、文学共に大きな影響を与えた漢代の史官司馬遷が書いた《史記》である。ここで《史記》五つの記述形式の中、特に注目したいのは「列伝」である。「列伝」とは個別の人間を中心とする記述である。この歴史記述方式は、司馬遷によって創始されたといわれている。70篇列伝は「伯夷列伝」から始まり、「太史公自序」で終る。各篇のタイトルを見れば、個人名で表記するものもあれば、ある理念を題目に集団的記録している内容もある。ここで「廉政思想」の伝承性と関係あることで、その内容をみたい。

司馬遷は列伝最後の第70篇「太史公自序」において、第59篇の「循吏列伝」と第62篇の「酷吏列伝」の制作意図を表明している。その内容の詳細は以下の通りである。

- ① 国法に従い条理に従う役人は、功勞を誇ったり能力を誇ったりすることがなく、庶民に賞賛されることもないが、また過った行いもない。よって「循吏列伝」を作る。
- ② 民は本をないがしるにし、偽り多く、法規を犯し法律をもてあそび、善人さえ教化できなくなった。されば酷吏は、一切を嚴格刻薄に処置しなければ人民をすくうことが出来ないとした。よって「酷吏列伝」を作る。 (世界文学大系 小竹文夫 小竹武夫訳より)

《史記》の「循吏列伝」と「酷吏列伝」の理念と形は、後の時代に於ける史書の「循吏伝」著作の典型になったのであるが、世に良い模範を提示するため、「酷吏伝」の伝承が見られない現象は、当然起こりうる結果であろう。末端に対して清廉な政治理念を教育で普及させるにあたって、大きな原動力である「循吏意識」の養成と推進は、後世に多くの循吏に関する書籍の編撰を煽ったのであろう。現に《四庫全書》に限ってみれば、①宋代費樞撰の《廉吏傳二卷》、②明代喬懋敬撰《古今廉豎八卷》、③明代黃汝亭撰《廉吏伝》、④清代孫蕙撰《歴代循良録一卷》、⑤清代張先嶽撰《循良前伝約編四卷》など関連する書籍が収録されている。これら著作の創作理念と形について、《史記》「循吏列伝」の延長であると考えられる。そして《四庫全書提要》からは、これらの書籍について、それぞれの編纂方式と内容に対し必ずしも高く評価されていないが、しかしすべて古今の「廉吏」を中心として編纂されており、「酷吏」を取り上げることはなかったことに注目すべきであろう。この現象はまさに「廉政思想」を推進する伝承のあらわれであり、本論が取り上げたい作品集《廉政小小説》の編纂理念と一致すると考えられる。

二 大衆文化による伝承

政治批判はそもそも庶民層の不評不満から噴出すのが自然であろう。中国において、古来大衆文化といえ、口頭的創作である伝統的民謡「順口溜」が最も代表的ものと考えられる。そのほかに、文学の創作として、近現代小説の範疇に社会批判性の強い「譴責文學」を重要視すべきである。ここではその二つの分野について、「廉政理念」との伝承性について考える。

(1) 「順口溜」について

古より民の政治に対する不評不満の声を「順口溜」という「俗詩」として、常に末端で流行している。現在では「俗文学」の一環「口頭文学」として、研究対象にもなっている。「順口溜」は短い詩句の形になっており、一般に口語的な「民謡」と見なされている。ここで現代「順口溜」作品の数例を上げたい。(《当代順口溜与社会热点扫描》より)

- ① 「貪汚的都是管錢的、受賄的都是有權的。」
- ② 「干部出風頭、群眾吃苦頭。」
- ③ 「三個公章、不抵一個老鄉。」

「順口溜」表現の内容が一般社会における普遍のことではあるが、なかでも政治的政策、更に官僚たちの汚職に関する批判が多く占められているのが特徴である。特に時代変動が激しい時期に、創作が盛んになり、より多くの作品が世に流行する現象は、古今変わることはない。現在このジャンルの作品集が多く出版されており、社会現実と政局変化を反映する重要な材料として注目され研究対象になっている。これら作品集の編纂背景こそ「官」の支配側との関わりが少ないが、しかし作品内容について、作品集《廉政小小説》と実質的に共通するものとする。この点について、のちに具体的に作品の内容を取り上げながら説明を加える。

(2) 清代「譴責小説」の伝承

ここでもう一つ廉政理念の伝承と深く関わる「譴責小説」の時代的背景に説明を加えながら、その関連性を述べたい。

中国小説の発展は、一般に近世の宋代が発端であると考え、独自の歴史を持って展開されたのである。宋代は印刷技術の進歩によって、多くの短編、長編小説が育てられた。その後明代に入って、四大奇書と称する《三国演義》、《水滸伝》、《西遊記》、《金瓶梅》のような庶民生活の裏面を写実的に描写する長編小説が生まれたのである。このような小説の伝統をふまえ、清朝時代に《紅樓夢》、《儒林外史》のような長編大作が生まれ、中国小説が完成の域に達したと言われている。アヘン戦争後の近代では、西欧文化の影響を受けながら、口語で書かれた作品は小説の理念を変容させ深化させたのである。本論は清廉な政治思想との関わりを検討することで、特に清朝末期の作品に注目したい。

清末時代、中国の小説史の流れにおいて、特別繁栄した時期であるといわれている。その隆盛の背景について、さまざまな見方があるが、文学史家、評論家阿英氏の著作《晚清小説史》に基づいて、この点について簡単に説明すれば、概ね以下3つの理由があると考えられる。①印刷技術の進歩により、書物の量産が出来るようになった。更に新聞事業が盛んになり、市場のニーズが増加したのである。②当時の知識人らは西洋文化の影響を受けて、小説が社会的重要な意義と役割があることを認識したのである。③清朝が度々外敵に敗北し、政治腐敗の状況が酷く、小説を書いて風刺批判しながら、愛国と維新思想を提唱するのである。

①について、清末時代の新聞事業が盛んだったという背景に、小説の社会的効用を目的とした雑誌を創刊することもあれば、作家自身の作品を売り物にして稼げるため、自ら雑誌を刊行し、他の

作家の作品を登載することも多かったのである。このような実態から、後に名作になった数多くの作品も全て当時発行された雑誌に連載発表されたのである。②と③について注目したいのは、従来小説に対して、単なる趣味であり、娯楽的なものと見なしている知識人たちが新たに小説の社会的意義と文学的価値を認識し、肯定し始めたのである。当時彼らは特に社会風潮の転移と修正、政治の腐敗と国勢の弱さに対して諷刺効果があると、さまざまな論議を喚起したのである。この背景から、当時小説の創作題材において、「循吏」物語よりも政治腐敗のさまざまな場面及び官吏たちの醜態を暴く内容が多かったのは事実である。ここで、この時期に生まれた数々の名作において、特に注目したいのは、後に「廉政理念」の伝承と深く関係する「譴責小説」の作品である。

清末の名作の中「譴責小説」と呼ばれている作品群がある。「譴責小説」の名称は、魯迅によってなされている。「譴責小説」の代表作は《官場現形記》、《二十年目睹之怪現狀》、《老殘遊記》、《孽海花》の四作品といわれる。この四作品の内容は、異なる舞台と視点で共に現実政治の矛盾と不合理を描写している。これらの作品はそれぞれに特徴を持っているが、後に文学史の視点から、作品によって、作者の創作動機が当時創作の現実的風潮に流され、官僚腐敗の醜態の描写は生動的だが、作者自身の時代的改革に対する使命感が薄いように思われるとの批評を受けている。しかしこれらの作品を創作する時代というのは、「小説」という文学ジャンル自体が社会においてまたは「文学作品」として確実に肯定的評価と位置づけが、まだ深く根付いたわけではない。「小説」をこれまでの既成概念の範疇において、従来の庶民的娯楽としての性格が作者の創作意志に影響するのは当然であろう。魯迅がこれらの作品に「譴責小説」と名づけた理由には人民は政府がともに政治を語るにたりないことを知り、にわかにこれを攻撃する考えをもち、それが小説では裏面をあばき、悪弊を剔抉し、時の政治に厳しく糾弾を加え、或いは更に拡大して風俗にも及ぶようになった。(中略)・・・それは構成も技巧も風刺小説とは大いに異なっていたので、別にこれを「譴責小説」と呼ぶと、彼は著作《中国小説史略》で示している。

「譴責小説」の代表作には特に官僚世界を中心として、その腐敗を極める実態をえぐりだすように描写するのが《官場現形記》の作品である。作品の中に清潔な官吏が一人も登場していないところでは他の「譴責小説」作品と異なるのである。作者は「千里為官只為財」のように、金に執着するだけが目的とする貪官汚吏を数多く登場させ、その振る舞いを生き生きと描写している。上は「軍機大臣」から下は下層小官まであらゆる役人を登場させている。この作品について、上述の《中国小説史略》では「官界の遊泳術を描いたものである。」と指摘している。当時「譴責小説」の作家たちとして、社会に対して積極的な風刺精神に欠けていることがたびたび論議されている。しかしその時代で小説というジャンルが政治的批判をもって確立させる過渡期であろうときに、作家たちは政治的改革をする志がないといえども、それらの作品の内容が社会に共感を受けたことは間違ないと思える。

時代が変わり、小説の社会における地位が確立された今は、作家たちも自由にテーマを選び創作できるようになったのである。司馬遷は《史記》に「循吏」も「酷吏」にも列伝を書き残したのだが、後世では循吏ものの伝承だけが主な方向になっている。模範だけを提示することではなく、反

面教師として、貪官世界を生動的に描写し、創作のテーマにすることで、読者に共感を得ることは現代文学思想において、決して単なる戯れではない。小説における社会的位置づけから考えれば、それなりに重要な社会的教育の価値がみいだせる。今回取り上げる《廉政小小説》は、社会各階層から清廉の風潮を深化させることが目的である。よって作品集に収録された作品の数々について、「循吏」だけをもって清廉な政治意識を伝達する内容だけに留まらず、上述「譴責小説」のように、「酷吏」たちの生き様を「小小説」特有な表現法をもって描写し、政治腐敗に対する怒りを庶民の共感を呼び起こしながら効果を高めるのが主旨とみる。

ここで注意せねばならない。つまり《廉政小小説》作品集に収録された各作品は、当初からこの作品集のために創作を行ったわけではない。作品集の編纂は政府の廉政政策を推進のもとで行われた結果である。よってこの作品集に収録された作品は、それぞれが作者自身の創作意識に基づき、自分なりの創作表現を行ったのである。以下は作品集《廉政小小説》の作品を具体的に取り上げ、作品集の編纂過程において、収録作品の選定に関わる各作品の創作表現の特徴について考察する。

第三章 《廉政小小説》の編集主旨から見る作品創作表現の特徴

上述したように、社会における清廉な政治意識は、古よりさまざまな形を通して伝承されてきたことは明らかであろう。本論が取り上げる《廉政小小説》作品集もその一つの形態であると考えられる。そしてこの作品集の明確な編集主旨と目的から、作品の創作表現がこれらの伝承と深く関わっているといえる。社会風潮の改善と腐敗を消滅することを目的に、そういった庶民感情に対して、よりよい効果をもたらす内容を考慮した作品の選定作業が窺い知れる。以下その点について、考察する。

一 作品の表現と編集主旨の関わりについて

(1) 作家と作品の選定

この作品集を編集する際、当然清廉な政治理念を推進できる内容のものを選定条件とするが、作品の内容だけ見るのではなく、創作レベルも重要視されている。実際この作品集に収録された作家を検視すれば、高名な作家の作品が数多く収録されていることは事実である。

(2) 作品排列の意図と意義

この作品集の一番重要な目的は、「廉政理念」を広く伝承することである。よって作品の選定から編纂する際、作品排列の順番はある程度重要な意味を持っていると考える。この点について実際に収録された作品を検視すると、その編纂の仕方にある特徴が見られる。それは巻頭及び巻末に登載する作品の内容は、この「廉政理念」を如何に強く読者に打ち出せるかを考慮し、意図的にその目的にふさわしい作品を選定しているからである。この配列には2点ほど注目するところがあると考える。

その1：巻頭作と巻末作の選定について

俗世に清廉な官吏の模範を第一に読者に印象付けるため、この作品集の一番に登載された作品「巻尺」は、まさに汚職と対立する公正たる清廉な「循吏」の物語である。そして巻末に選定された作品「清淡」は、「廉政理念」の最高境界に達した清廉官吏の徹底的な思想意識を示す話である。

全86篇が収録された各作品の内容を見れば、「循吏」の精神を貫く心構えを表現することを皮切りに、数多く汚職腐敗社会の諸相が波乱万丈の官吏たちの人生ドラマを多角度から描写する数々の作品を続き、最後に最高境界の清廉思想を持って、《史記》から伝承された「循吏」の典型を完成される道のりを示した作品で締めくくっているのである。そしてこの最初と最後の両作品が同作者であることにも注目すべきである。以下はこの巻頭作品と巻末作品の内容を解説しながら検討する。

巻頭作：「巻尺」 邵宝健作

（解説）ある化学工場の基礎課に勤める職員は、建築材料の管理と測定の仕事を担当している。勤続年数が長いキャリアも厚い。工場に始めて作ったトイレから最近建設したばかりの住宅ビルまで、全てに彼が関わっている。結婚していないため、生活の楽しみはタバコと酒以外に、最も好んでいるのは目測することである。ライフ用品、家具全てのものに対して測っている。そして彼の目測の正確性が人々を驚かせたのである、その誤差はプラスマイナス2ミリほどである。よって彼は自分の仕事に対しても自信があり、正確さに対して絶対的公正心を持っている。建設関係の仕事であるため、工事中さまざまな建造物が寸法の誤差によって、業者に損害をもたらすことは度々あるが、彼は絶対に容赦しない。ある日、ある工事の担当者が彼の家を訪ね、二人は馬が合ったように酒に酔った。客が2本の酒とタバコを置いて帰ろうとすると、彼は「忘れもの」と客に注意をしたが、相手は「気持ちだけです」といって帰った。

翌日、その工事担当者とともに現場で測定の仕事をしていたが、建造物の寸法にどうしても大きな誤差が生じる。担当者は彼に昨夜の酒とタバコに大金が包まれていることをほめかしながら、おお目に見て欲しいと願った。もう一度測定しようと彼は少し躊躇したようだが、結局自分が測った数字は正しいと主張し、そして担当者に昨日の贈り物は既に工場へ渡したので、自分で取りに行きなさいと叱ったのである。この事件発生以来、彼には「巻尺」というあだ名がついたのだ。

この作品は極普通の汚職事例を描写しながら、廉吏の堅い意志をいかに維持できるかを表現している。内容から見れば、公職の官吏なら誰でも遭遇可能な汚職事件であろう。作者はユーモア的に少々怪しい性格の主人公を通して、誰でも抵抗しにくい誘惑を、如何に断然拒否できるかを訴えたのである。ごく一般的なことである反面、一番難しいケースでもあるのだ。この作品を冒頭に登載する意図は、この作品集が掲げる清廉意識をまず明確に打ち出すためであろう。官吏はまずこうあるべきだと「循吏」の典範を提示しながら、その思想と伝承の重要性の示唆であると考える。

巻末作：「清淡」 邵宝健作

（解説）ある住宅地の38号室に住む住民の銭可淡は現地では有名な人物である。その有名になった理由は、賄賂を拒否する回数が最も多い上、賄賂を拒否する方法も巧みであるからだ。彼の清廉さは人々から大変な尊敬を受け、その生活意識は清廉さを極めている。彼に対しての理解度が深まるにつれ、彼に対しての賄賂行為はもう起こらなくなったのである。

銭氏の税務官たる生涯は40年間あったが、退職時にはある税務所支所の副所長に過ぎなかった。定年退職の手続きをしている間、自宅に二人の来客が見えた。彼の清正廉潔に感動し、是非退職に対して記念品をさし上げたいと言った。その記念品とは、その廉潔さにふさわしいモチーフの青野菜と大根を描いた一幅の水墨画だった。賄賂だという誤解を避けるため、絵は表装していなかった。銭氏は受け取らないと言ったが、二人の客は「あなたの清廉さはみんな良く知っている、これはまさにあなたの清廉さを表示するためのものだ。」と退けない。銭氏は客の誠意に感動し、その絵を受けることにした。その後すぐにこのことについて、さまざまな憶測が飛び交い、この画は5000元（約8万円）であり、ある有名画家から購入されたなどの噂がたちはじめたのである。

噂が混乱するなか、退職当日、銭氏はいつものように職場に向かった。同僚全員に分かれの挨拶をした後、彼は一枚の絵を取り出して、全員に語った：「今日で退職です。皆さんに感謝したい。お礼に皆さんにこの絵を差し上げたい。この絵画の鑑賞権は全員にある。この絵画の所有権はこの官署にある。」その絵画は銭氏によって表装され立派になった。そして絵に新たに「清淡」と題款され、横に「お互いに励ましあいましょう」と銭氏の筆跡で書きとめたのだ。このタイトル「清淡」が示した精神はまさに清廉政治の風潮を導く最高の理想境界であろう。

巻頭と巻末は同作者の作品であることは先に述べたが、その注目する作者の邵宝健は、浙江省作家協会会員、国家二级作家、湖州市作家協会の顧問を務めている。1978年から作品発表を始め、《青年文学》《小说界》《萌芽》《北京文学》《人民日报》など数百種類の新聞、期刊で小説及び散文、雑文など作品700余篇を発表している。また2002年中国作家協会から“当代小小说風雲人物榜・小小说星座”の荣誉称号を受けている。上述した「清淡」作品は彼の代表作品の一つとして評価されている。《廉政小小说》作品集の締めくくりとして「清淡」を選定したのは、その精神的境界が重要視されただけではなく、定評ある作者の作品であることで、作品選集の深みがより一層重厚になることで疑問の余地はない。

【その2】：「廉吏」と「貪吏」の対照表現について

上述したように、巻頭に「循吏」の典型的内容の作品を配置しているが、2番目の作品は「貪吏」の愚かさや形成の軌跡を描写する作品を置いている。この作品のタイトルは「金魚」である。作者劉国芳は上述の邵氏同様“当代小小说風雲人物榜・小小说星座”の荣誉称号を受けている。作品の主人公は金魚を沢山飼っている友人からのアドバイスに従って、上司を金魚と見なし、一万元（約16万円）の賄賂をして昇進を期待するが、効果が得られなかった。しかし上司は数百万元の賄賂を受けた事実が告発され、逮捕されてしまったのだ。その後新しい上司が就任し、主人公の能力が認められて昇進することが出来た。嬉しく思い友人に報告したところ、友人から何十匹の金魚を送ら

れてきた。「気をつけなさい。人が餌をくれるから。」と言われ、今度自分が「金魚」になったことを悟ったのである。作品では、友人は金魚に餌を無限にあたえ続けて、結局金魚が過食で死んでしまった実験を彼に見せたのだ。作者は金魚が餌を無限に食べる習性をもって、人間の貪欲さを点破しながら警鐘をならしたのである。

一番目の「廉吏」作品の模範的イメージとは対照的な2番目作品の配置について、編集側の意図は明らかである。この作品は、廉政文化理念の推進に当たって、その大敵である貪汚官吏たちの心理的病が、金魚の「貪欲さ」の習性と同じであることを身近に存在する金魚をモチーフに、明快に示したのである。小小説特有な簡潔でユーモアに富んだ表現を通して、説教とは思わせないほど、2番目の作品として配置し、読者に少しでも早くこの作品集が最も訴えたい主旨を容易に理解させ、納得さしめることが考量されている。

二 各作品創作表現の特徴

この作品集において、収録された作品の内容は清廉な政治理念を推進する目的を持っていることは明白である。しかし作品として表現する際、より多角度で描写する必要があることも当然である。この作品集に収録された作品の内容と表現法を見てみると、実にさまざまな典型が見られる。循吏の清廉さを正面から訴える表現は多く見られるが、典型的腐敗官吏の実態描写も実に多数占められている。ここでは作品の内容について、特に注目したい表現を取り上げる。

(1) 「循吏」に関する表現

《史記》以来の伝承を受けて、作品集にはやはり循吏物語は欠かせない。ここに収録された作品は、「循吏」の模範としての描写よりも、世間での腐敗の現実との戦いについて、多方面から描いているものが多く占めている。ここで特に注目したいのは、「酷吏」との対抗、腐敗社会の濁流に浮沈する現実、そして彼らが清廉の情操を守るための苦悩などの表現である。そして現代社会こそ存在する新たな腐敗形態と社会問題も作品の描写から露呈されたと考える。以下はこの点について、注目すべき代表的作品を取り上げながら考察する。

作品① 「郷政府裏の空き地」 侯秀山 作

(解説) 某郷政府の裏に未開発の広い空き地がある。ある年に張氏が郷書記に就任したのである。張氏は泳ぐことが趣味だったため、郷機関はかれのご機嫌取りに小学校を修繕する名義で予算を取って、空き地にプールを作ったのだ。年に数回水泳大会も行なった。次に就任した李氏は泳ぐことが大嫌いで、プールで泳ぐ人々の姿をとんでもないと考え、定例会議上にプールで泳ぐことを禁止すると指示したのだ。その後、郷の官吏たちは李氏の趣味がバスケットだったことを知った。彼のご機嫌取りのため、郷の救貧予算を利用して空き地にバスケット場を作った。年に数回も試合が開催された。3年後、郷の書記が新たに侯氏に変わった。侯氏はバスケットに興味がなく、仕事に影響あると批判的な態度を示したため、バスケットに興じる人はどんどん減って誰もなくなってしまった。侯氏の実家は県城にあるので、日曜日も家に帰らずに、いつも一人で水と携帯食をもって2000mの高山の奥へ登っている。郷長は侯氏の趣味が登山と思い、バスケット場を壊して山を作

ろうと考えた。厳しい財務状況のなかから知恵を絞った結果、いつものやり方で村民の税金を増やし、何らかの名目を作って徴収してお金を集めるのだ。そして絶対に書記侯氏に隠すことを官吏たちに注意した。暫くして裏の空き地に工事が始まり、侯氏の目に止まることになった。侯氏はおかしく思い始め、事務所の主任に尋ねると、主任は山を作ることだと回答した。理由を聞くと、自分の登山のためだと言うもんだから、侯氏はすぐに「でたらめをするな。私がいつも山奥へ訪ねたのは、そこに住む百姓たちの生活状況を調査するためなのだ。」

作者は地方行政に重要な役職である書記侯氏の難しい立場を描写している。書記の知らずところで周囲の貪官たちに振り回されてしまう。国家の財源を食い潰すことばかりを考える腐敗の社会意識が定着している風潮の中、官吏の清廉さを保つ最も厳しい敵である周囲環境の問題点を提示している。この点に関連して、以下ここで循吏が清廉さを守るための戦いと苦悩を描写する作品を取り上げる。

作品② 「申請」 曾平 作

（解説）某新聞社の記者が清廉で高名な検察官の常鳴氏を取材したとき、常氏は厳肅に机の横にある小金庫から一つのファイルを取り出したが、中には一枚の紙がしまわれていた。常氏は苦痛な表情で記者に言った、「笑われるかもしれないが、何度もこの反貪汚の仕事をやめようと考えたのだ。」その紙は常氏が書いた職務移動要望の申請書だった。そのあと常氏はまた小金庫の奥から一つの木箱を取り出した。箱の中には常氏と同様に職務を移動する要望の申請書が入っている。申請書にうすくなった赤色のしみが見える。常氏はそれを見て重い口を開いた。1987年彼は一件の汚職犯罪を裁決した。犯人は自分が小さい頃よくお世話になった幼馴染の父親だった。裁判中友人とその母親から何度も頼まれたが、結局その父親は撤職され、服刑することになったのだ。判決後その幼馴染から絶交され、多くの同級生からも「功名」のためだと罵倒された。そのうえ親からはもうどんな仕事をしてもよいが、この検察官の仕事だけは辞めればと言われたのだ。彼は辞職の申請書を書いて、当時の上司の劉署長の自宅へ提出する途中でそのまま帰ったのだ。「辞職」する意志を中止した理由は、当時劉署長の義理の父親が汚職事件に関わって、家庭内部で離婚問題まで騒動が起こったが、結局劉署長は公正に判決を下し、その義理の父親は有罪と判決され、服刑することになったのだ。のちに常氏自身が検察官の仕事をしているため、妻は就職先から内定をはずされてしまい就職できなくなったのだ。その後このような事例は2度3度あったが、そのつど申請書を持ち出すが、いつも悩みながら上司劉署長の凜とした姿勢を目前に、それを提出する勇気がなかったのである。

劉署長の辞職申請書は1992年の初めころで、市の最も大規模な賄賂案件が見つかり、犯罪者らは劉署長に対してあらゆる手段で脅迫した後、彼を殺したのだ。血まみれに倒れた劉署長の服の内ポケットにこの申請書があった。その薄赤のシミは、劉署長の血の痕跡である。劉署長の臨終には「家庭と命まで捨てる覚悟ができるなら、反貪汚の仕事を恐れることはなにもないだろう。」と言い残されていた。作者はこのことばが誰に対して言っているのかを明確にしなかった。常氏たち現役の検察官らに対して？それとも犯罪者に？または劉署長が自分自身に対して言っているのかはわからない。常氏はいまでもその答えを考え続けていると作者は締めくくっている。

作者は、「循吏」の模範である劉署長または現に悩み続ける常氏たちの背後に、常にまつわる恐ろしい官吏たちの貪汚の実態と横着さを描写している。清廉の思想情操と正義を守るため、絶えることのない苦悩と苦痛に堪えていかなければならない。さらに自分の命をも犠牲にすることさえもあるのだと、その残酷な社会的現実を訴えたのである。

(2) 「循吏」と「貪吏」を描写する作品数について

この作品選集は総計86作品を収録しているが、その中「循吏」を描写した作品数は極少である。上述した「申請」と巻首、巻末の2作品を含めて、循吏たちの奮闘、苦悩、犠牲の実態をユーモアに、また痛ましく描写している。表現の技巧について、小小説が持つ独特な表現法を十分に発揮している。

さて「循吏」も「悪吏」も人間ドラマなので、描写手法に上下の差はないであろう。作品を檢視すると、汚職の悪吏を描写する内容の作品がより多く収録されたことが明らかである。これは編集のバランスに問題があるのではなく、現実社会において、循吏の存在は汚職の悪吏より遥かに少ない現実があることを否認できないからだ。汚職の悪吏たちは、社会のあらゆる場所に潜んでいるし、その生き様は小説の世界を超えた真相であり、読者が十分身近に共感できる現実世界である。上述で触れた清末の譴責小説《官場現形記》のように、その小説の内容に清潔な官吏は一人も登場していないことに対して、時代が変わっても一向に進化していない現実がうかがい知れよう。作品が悪吏の生き様を多く描写できる材料を提供した現実社会において、その汚職問題の深刻さと重大さは、この《廉政小小説》選集を通して露呈されたといっても過言ではない。

(3) 作品における犯罪結果の表現

以上明らかになったように、この作品選集において、「悪吏」に関する内容は「廉吏」物語の数を大きく上まわっている。この実態に関して、作品の選定においてすでに現実社会の真相がそのまま反映されていると考える。そして各作品が官吏たちの貪汚事例を描く際、ある特徴が見られる。それは犯罪行為の結末が因果的表現され、犯罪者の反省があれば、新たな人生のやり直しも可能だというメッセージが強く暗示され、訴えられているように見受ける。

犯罪行為について、この作品選集で編集者が欲するところは、単に面白く戯れ的に風刺するのではなく、その犯罪過程が巧みに表現され、最後になんかな形で処罰を受ける結末と結びつくような構想が多い。要するに、金銭と権力による収賄などの行為に対する読者の憤慨が発散できるよう、道徳的にストーリーの結末に犯罪者が受けるべき処罰が巧みに組み込まれ、犯罪者への嘲笑が聞こえるような構図が多く含まれているのである。

そもそもこの選集に収録された作品は、それぞれが単篇の創作である。貪汚行為は手放し状態ではいけないし、犯罪者が肉体的に受刑すること、または精神的にも苦痛がともなう処罰を受けるのは廉政理念を推進するに当たって、当然取るべき手段と考慮される。この選集において、貪汚行為の結末は法律によって必ず処罰されるという信念を再確認させるため、作品の選定にあたって、感傷的に腐敗の犯罪に巻き込まれたり、或いは汚職を犯罪から安易に逃れたり、犯罪者に対してただ無力で虚しさを感じ嘆する描写を避けて、犯罪行為に対して多面的にあるべき処罰を受けさせ、反省

と改心の道を開く表現を重要視していると考える。

(4) 汚職実態表現の現代の特徴

この作品集は現21世紀の社会を描いていて、当然《史記》、《譴責小説》の時代とは異なる。表現の宗旨が同じであっても、汚職という人間の精神構造に宿る欲望が時代を超え得ても、当然社会的背景とライフスタイル上の相違は必然的に生じる。よって、新しい形態の汚職と犯罪が随所に見られる。たとえば、「国外会議」、「ある海外への視察者」の両作品は国際社会を舞台に、官僚たちが海外へ視察中の怪しい様態を描写している。また「携帯電話」、「賢い携帯電話」などの作品は、現代的ライフスタイルに必要な携帯電話を擬人化させ、犯罪を暴く道具として使用している。さらに携帯電話を犯罪道具に使う内容もみられる。小説の想像的世界とはいえ、これらの特徴から確信できるのは、現代の汚職犯罪は、時代とともに進化し、金融システムの発達により、汚職行為が単に官界だけにとどまらず、個人でも容易に侵入できる世界に変化しているのである。そして特に金銭と権力に関わる汚職行為の範囲は、もはや国内だけに限定されず、科学技術の発達にともないその規模も拡大、複雑化され、舞台も国際化している。

結び

2009年9月12日（朝日新聞より）台湾の前総統が資金洗浄や機密費横領、収賄などの罪に問われた事件の公判は、陳前総統に対して無期懲役、終身公民権剥奪、罰金2億台湾ドル（約5.6億円）の一審判決が言い渡された。台湾で総統経験者が有罪判決を受けるのは初めてである。韓国でも同じ収賄事件で大統領二人が犯罪者として逮捕されている。更に同年5月23日汚職疑惑によって盧武鉉（ノムヒョン）前韓国大統領が自殺した事件も発生している。かつて世界を震撼させたアメリカ大統領のウォーターゲート事件、日本のロッキード事件もまた記憶に新しいであろう。古今、洋の東西を問わず、政治家の貪汚収賄犯罪が永遠に消えることはない。中国に関して言えば、80年代に開放政策を打ち出して以来、この類の汚職犯罪件数は、それ以前の鎖国時代よりも多発していると言われている。腐敗事件の真相が世に明かされやすくなった背後に、中国人社会の意識の開放とともに、清朝末期から参入できた新たな社会的公権力として、社会の腐敗を暴露させるジャーナリズムの力が働いていることは事実であろう。現在における国際社会との関わりが深くなればなるほど国際的ルールに従わなければならないし、金銭の流動が監視され、犯罪を隠蔽することが難しくなった面もある。政府も貪汚腐敗に対して、あの手この手の政策で阻止するが、一向に減少をみないのが現状である。今回の作品集の編纂もその政策の一端である。そして小説を社会教育の伝達道具としてショット・ショット文体を選んだことに、多くの読者層を持つ現実性が重要視され、より高い効果が期待されている意図は明白である。「小小説」という文体を選択したことによって、これまで廉政理念における文学的伝承範囲を突破しながら、創作の面において、より自由に表現し、伝達することができたと考える。

今回取り上げた作品集に収録された作品について、さまざまな貪汚収賄事件が発生する背景要素

に対して、各作者は異なる視角から捉えて作品を描いている。この作品集は末端に対するまでの教育を目的としていることが編纂側からも明言されている。実際に清廉の政治を維持できるのは、一人の人間の修身も重要であるが、家族、親戚または周りの人々も同時に理念と認識を正す必要がある。よって上述した《中国廉政文化叢書》の中に、今回取り上げた《廉政小小説》のほか《廉内助 貪内助》(清廉な内助と貪欲の内助)という作品集が組まれていることを見れば、有意義であり、意味深長であるといわねばなるまい。

《廉政小小説》は単篇ものから集めた作品集である。単篇の作品としてみた場合、別々に独立した文学作品であり、ショット・ショットの特徴を生かした創作だから、魅力のある作品だといえる。だが、この《廉政小小説》のような硬質なタイトルの作品集に収めてしまえば、全体的にイメージが色づけされ、読者から敬遠される嫌いもある。しかし中国社会において、古来「循吏」、「酷吏」の理念が常に社会価値として存在しており、文学を通じて広くその理念を後世に伝えるという古い伝統は、現在の中国社会にも受け継がれているといえる。そして「小小説」という文体が現在広範囲に流布されている事実から、予期された社会的な役割と効果が十分に生かされることを期待する。

主な参考文献

- 「史記」世界文学大系 筑摩書房 1968
- 「中国小説の世界」内田道夫編 評論社 1970
- 「中国文学発達史」劉大杰著 臺灣中華書局 1970
- 「官場現形記」李宝嘉著 入矢義高 石川賢作訳 平凡社 1994
- 「当代順口溜与社会熱點掃描」樹建 左愚 著 中國檔案出版社 1994
- 「老百姓的智慧 大陸當代順口溜賞析」李玠 編著 麥田出版 2000
- 「晚清小説史」阿英 東方出版社 1996
- 「中国小説史略」魯迅著 人民文学出版社 1981
- 「清末小説與社會政治變遷」葛芳伶 著 大安出版社 1994

(せき きりん：アジア文化学科 教授)